

業績説明書

野崎 優樹（甲南大学 文学部 人間科学科）

主要業績 1

14. **Nozaki, Y.** & Kobayashi, R. (2024). Instrumental motives in emotion regulation of one's own and others' anger: Testing cross-cultural similarities and differences between European Americans and Japanese, *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 55(2), 189–215.
<https://doi.org/10.1177/00220221231212176>

パフォーマンスを上げるためにネガティブ情動を高めるといった「道具的動機」は、自分自身や他者の情動を調整する際の主要な動機の1つである。しかし、怒りなどの情動の望ましさは欧米と東洋の文化圏で異なる可能性があるにもかかわらず、道具的動機に基づく情動調整に関する研究の大半は欧米諸国で行われていた。本論文では、ヨーロッパ系アメリカ人と日本人を対象とし、自分の怒り（研究1）と他者の怒り（研究2）を調整する道具的動機の文化間の共通点と相違点を検討した。事前登録を行った実験の結果、道具的動機に基づく怒り調整は、自他の情動調整の両方において、ヨーロッパ系アメリカ人と日本人の間で共通点がより強く認められることが示された。

主要業績 2

13. **Nozaki, Y.** & Mikolajczak, M. (2023). Effectiveness of extrinsic emotion regulation strategies in text-based online communication, *Emotion*, 23(6), 1714–1725.
<https://doi.org/10.1037/emo0001186>

本論文では、オンライン上のテキストコミュニケーションにおいて、他者のネガティブ情動を効果的に調整可能な方略を検討した。研究1では架空のペンフレンドに対する返信内容について、第三者が方略と有効性の評価を行った。研究2ではオンライン掲示板上で参加者同士が実際に交流した文章と評価内容を分析対象とした。両研究で一貫して、相手に状況への別の見方を提案する「再評価」と、そのような気持ちになるのも分かる上、当然だということを伝える「共感的応答」が、受け手のネガティブ情動を効果的に和らげていた。さらに、状況改善へのアドバイスを行う「問題解決」と、前述した「再評価」は、受け手のネガティブ情動が比較的弱い時に限り効果的に働くことも示された。

主要業績 3

10. **Nozaki, Y.** & Mikolajczak, M. (2020). Extrinsic emotion regulation, *Emotion*, 20(1), 10–15.
<https://doi.org/10.1037/emo0000636>

これまでの情動調整研究では、主に自己の情動の調整（内因的な情動調整）に主に焦点が当てられており、他者の情動の調整（外因的な情動調整）に関する研究は、まだ始まってきたところである。本論文では、既存の研究知見を概観しながら、他者の情動の調整とは何であり、情動伝染、共感、向社会的行動、ソーシャルサポートといった関連する構成概念からどのように区別されるのかを定義した。その上で、他者の情動の調整を実行する心的過程とその個人差をどのようにモデル化できるのかを展望した。これらの議論を通じて、他者の情動の調整は自己の情動の調整と非常に共通しているものの、この2つは同等視できないことが示され、今後の研究の必要性を議論した。

主要業績 4

7. **Nozaki, Y.** (2018). Cross-cultural comparison of the association between trait emotional intelligence and emotion regulation in European-American and Japanese populations. *Personality and Individual Differences*, 130, 150–155.
<https://doi.org/10.1016/j.paid.2018.04.013>

アメリカをはじめとする欧米の文化圏と、日本をはじめとする東アジアの文化圏では、情動を調整する方略の有効性が異なるという既存の知見を踏まえ、本論文では、特性情動知能と情動調整方略の使用傾向の関連の仕方が、文化間で変わる可能性を検討した。その結果、ヨーロッパ系アメリカ人と日本人のどちらでも、考え方を変えることで情動調整を行う「再評価」の使用傾向と特性的情動知能との間に正の相関が見られた。一方、情動の表出を抑えることで調整を行う「抑制」の使用傾向は、ヨーロッパ系アメリカ人のみ特性情動知能と負の相関が見られた。以上より、特性情動知能が高い人は、それぞれの文化的枠組みの中で、不適応的な情動調整方略を避け、適応的な方略を用いる傾向があることが示唆された。

主要業績 5

5. **Nozaki, Y.** (2015). Emotional competence and extrinsic emotion regulation directed toward an ostracized person. *Emotion*, 15(6), 763–774. <https://doi.org/10.1037/emo0000081>

本論文では、情動コンピテンスの個人差が他者の情動を調整する実際の行動と関連するのか、また関連する場合は、どのような状況において特に強く関連するのかを検討するために、サイバーボール課題を用いて被排斥者の悲しみを和らげる行動との関連を調べた。研究1の結果より、他者の情動に関するコンピテンスは、被排斥者の悲しみを和らげようとする行動と正に関連することが明らかになった。また、研究2の結果からは、他者の情動に関するコンピテンスは、被排斥者が明示的に悲しみを表出しておらず、文脈手がかりを用いて被排斥者の情動を推測しなければならない状況において、被排斥者の悲しみを和らげる行動と特に正に関連することが示された。